

佐古純一郎
青春この大切なもの



愛し合う
青春を見つめる
この大切なものから
真の人生を学ぼう

佐古純一郎

青春この大切なもの

二見書房

昭和44年4月5日 初版発行

著者略歴

一九一九年生まれ。一九四三年日本大学文学部宗教学科卒。現在二松学舎大学教授。主なる著書「佐古純一郎著作集 全八巻」「現代人は愛しうるか」など。

《検印廃止》

青春この大切なもの

¥ 450

著者 佐古純一郎

印刷 株式会社堀内印刷所

製本 株式会社徳住製本所

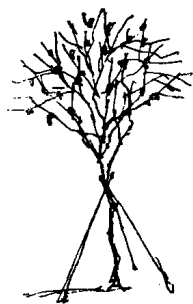
振替東京2639番
電話東京(263)0034番
東京都千代田区三崎町2-18-2

発行 株式会社 二見書房

© 1969 Printed in Japan.

青春この大切なもの

目次



信ずること 考えること

青春のときに求める 7

ほんとうの愛 29

一冊の本から 39

文学をどう読むか 43

青春の悩み 53

生きるものの心 67

人生と幸福 74

愛すること 生きること

失われた現代人のまこと 87

信ずるといふこと 109

汗のよろこび 117

恋愛は理屈ではない 125

美しき愛の契約『結婚』 133

人とつき合う法

人間であること 143

自分を大切にすること 145

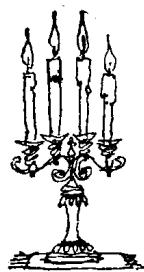
他人を尊重すること 148

人とつき合う秘訣 150

心の通じ合える人 153

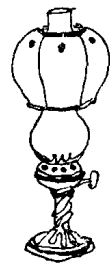
あながき	243
私自身の人生をふりかえる	173
幸福を求めて	170
エチケットとルール	168
責任をもてる人	165
信頼というつよい絆	163
ゆたかな愛の心で	160
味のあるつき合い	158
出会いのよろこび	155

信ずること
考えること



青春のときに求める

・限りある肉体のなかでの永遠のいのちと愛！



失われたものから 私は徳島の山の中の小さい寺で生まれた。それは西本願寺の末寺で、母の実家である。早くから朝鮮に出かけて行って、村では成功者の一人に数えられていた父のもとに嫁いだ母は、私のお産のために実家に帰っていたのである。

その母は私を生むと産後の肥立ちが悪く、二カ月の後に死んでしまった。だから私は母の乳房を吸ったことがないし、母の顔を知らない。娘時代に隣村の医院で看護婦をしていた時の写真が一枚あるが、黄色く変色してしまっている。

生まれて母を知らないということが、私の人生の門出の不幸であった。人は不幸の意識を通じて自己に目ざめるといわれるが、私の場合もそれは真理であったように思われる。

母に代って祖母や叔母が私を大事に育ててくれたけれども、母亡き寂しさを埋めてくれる

ものではなかった。

自分にはどうして母がないのだろうか、母はどこへ行ったのだろうか、誰が自分から母を奪ったのだろうか、そういう問題意識が、やがて私をもの考える人に育てていったように思われる。

寺で育ったということからくる環境的影響もつだって、私は次第に宗教的人格として育成されたのかもしれない。たとえば、「お葬式ごっこ」というままごとをよくやったものである。お坊さんになるのはいつでも寺の子である私であった。そんな時の子供のしぐさというものは、じつに正確であった。私は伯父の真似をして、坊主の役をつとめるのであるが、そういうままごとのなかでも、「死」というものについて、何かしらばくせんと感じたものがあつたのかもしれない。

母がないということ、**「母の死」**として考えるようになったのは、中学に入ってからであった。しかし、それはやがて、自分自身の問題になってきたのである。

「母の死」として考えてきた**「死」**が、ほかならぬ自分自身の問題であることに気がついた夜、私は眠れなかった。下宿の孤独な部屋でいつまでも考えつづけるのであったが、窓の外にひろがっている無限の闇のかなたから、死の足音がしのびよって来る想いで、私

は恐怖に締めつけられるような想いであった。

その日以後、私の人生は、「死」という問題意識で、まったく灰色にぬりつぶされてしまったのである。

何を考えても、そこにたちはだかるのは「死」であった。何をやってみても、けっきょく「死」にのまれてしまうのだとしたら、すべてがむなしという気持をどうしようもなかったのである。それはニヒリズムといえるような積極的なものではなかったが、ともかくも、虚無のなかに私は毎日を、おののくほかはなかったのである。

このような自分の生いたちを語りはじめたらきりがないが、しかも、このような生いたちを外にして、私には「信仰」という生の領域に参与することはとうていできなかったであろう。

「死」という自分の人生の根本問題をどう解決するか、私にとって「道を求める」ということは、そのこと以外の何ごとでもなかったのである。そういう青春の日の魂の彷徨ほろころをくわしく述べることはさしひかえたいが、私はいかなる道程を経て、イエス・キリストを信じる信仰に入ってしまったかということは、もう少し説明を加えておく必要がある。

昭和八年のこと、徳島中学校三年のとき、私は九死に一生を得るような病気を患った。

ほとんど絶望の状態になり、朝鮮にいた父は、葬式の用意をととのえて帰ってきた。幸いに一命をとりとめることができたが、いつてみれば「死の体験」をしたわけで、そのことから「死」の問題は、一段と私の内面において切実な意味を持ってきたといえる。

長い入院生活を終わると、父の配慮もあって私は、朝鮮の父のもとに行き、継母や弟妹たちといっしょに暮らすことになった。生活環境から来る孤独も手伝って、私の宗教的なものへの欲求は深まっていった。

放課後になると、公園の森の中に出かけて行き、親鸞の『歎異抄』を朗誦することを日課とした。浄土真宗の寺で育ったゆえもあって、私には親鸞の『歎異抄』はかくべつに親しみの深い書物であった。

森の中の、大きな岩の上に正座して、『歎異抄』のはじめから終わりまでを、毎日声をあげて読んだのである。第九章のつぎのくだりまで読んでくると、きまって私の両眼から、とめどもなくあつい涙が頬をつたって流れるのであった。

……久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだむまれざる安養の浄土はこひしからずさふらふこと、まことによくよく煩悩ぼんのうの興盛にさふらふにこそ、なごりをしくおもへども、娑婆の縁つきで、ちからなくしてをはるときに、かの土へ

はまるべきなり……。

思わず私の口から、「ナムアマミダブツ」という念仏があふれ出るように、唱え出されるのであった。

今から考えても、われながら、純情な青春であったと思う。もう中学も上級になっていたから、町の図書館でも、かなりむずかしい書物を読むようになったが、西田天香の『懺悔の生活』を読んで、一灯園いっとうえんの生活にあこがれを感じたりしたものである。

中学を出ると、私は京都で一年を過ごすことになった。

ある予備校に入ったのであるが、ほとんど学校には出ないで、平安神宮の前にある府立図書館に通って、カードの中から、「死」という文字のついている本をかたっぱしから読んでいった。そのことを通して、古来人類の先哲が、やはり、どんなにか「死」について思索をめぐらしてきたものかを思い知らされた感であった。読めば読むほど、「死」の問題は私にはわからなくなっていくのであった。

その秋のこと、私は田舎の叔母が危篤であるという電報を受けて、郷里に帰った。母に代って私を育ててくれた叔母である。長く胸を病んでいた叔母は、もうやせ細って、昔日の面影はなかったが、祖母といっしょに、私は叔母の臨終に立ち合ったのであった。

生まれてはじめて、人が死ぬ場面に直面したのである。叔母は苦しそうであった。やはり、寺に生まれ寺に育った叔母は、胸の上に合掌して、早くお迎えが来れば、と一刻も早く死ぬことを願うのであった。私は、せつなさに身をきられるような思いであった。明けがたに叔母は息をひきとった。

「死」の問題は、私の心のなかで、頂点に達したのである。葬式をすませ、京都に帰ると、私はもうがむしやらに、山科の西田天香の一灯園に駆けこもうとした。

父をはじめ、祖母や伯父の反対をおしきって、一灯園で生涯をおくろうと願ったのであるが、それもゆるされなかった。やはり私は恩愛の絆きずなをたちきることが出来なかったであろう。翌十三年の四月に東京に出て来て、九段の二松学舎専門学校に入った私は、その頃から、文学をやるうと決心したのであった。

永遠の生命を求めて 「死」の問題を解決することは、私にとっては、「永遠の生命」を求めることであつた。しかし、考えれば考えるほど、問題はわからなくなっていくのであつた。そういう懐疑のなかで、私はいつしかデカダンスのなかに身を沈めていった。性の官能の充足に、はかない気晴らしを求めるような生活がはじまつたのである。

しかし、もちろん、そういうことで、「死」の問題が解決されるわけはなかった。私は、仲間たちと同人雑誌を出したりして、自らの思索を文章に綴るような生活を見出したが、同時に、「宗教学」という学問が、何かしら、「死」の問題に対して解決の道を与えてくれるのではないかと考えたりして、二松学舎を出ると、すぐに、日本大学の宗教科に進学した。宗教科は夜の授業しかなかったので、昼間は働いた。

その頃もう私は、現在の妻と結婚せざるを得ないはめにたちいたっていた。その恋愛のことも書きはじめたらきりがなからやめるけれども、それはけっして祝福された結婚ではなかった。長男が生まれるまで、妻も働いてくれた。

もちろん、その頃には、もう太平洋戦争がはじまっていたわけで、私もいつ召集されるかわからないような不安があった。けっきょく私が落ち着いたのは、「国家」のために死にきることによって、永遠の生につらなるという、当時の、国家主義的な生命観であった。だから、昭和十九年の末に海軍に召集されたときも、私は、何かしら死に場所を得たような気持で戦争に出ていったのである。

しかも二十年八月十五日のあの終戦である。私の生命観は完全に崩壊し、私は、まったくの虚脱状態に陥ってしまった。自分の人生のよりどころは、何もなくなってしまった、

という気持が決定的に私を絶望のどん底に突きおとしてしまったのである。

私が戦争に行くとき、妻は子供をつれて郷里の山の中に疎開したのであるが、私はその家族のもとに復員したものの、まるで阿呆のように、毎日ブラブラとするだけであった。

そんなとき、私の手にたった一冊、与えられたのが聖書であった。その聖書は父のものであったが、私はそれをずっと利用していたのである。

表紙のとれてしまった古い聖書で、戦争に行くとき、蔵書を古本屋に売りはらったときにも、それは持つて行ってくれなかったのである。妻が疎開のとき、持つて帰ってくれてあったばかりにのこっていたのである。私としては、戦後、自分の所有した書物はその表紙のとれたぼろぼろの聖書だけだったのである。だから、私は、聖書一冊から出発した戦後の自分ということをいつも大切に考えているのである。

私は毎日その聖書を懐にして、山の中に入って行って、寝ころんで読みつづけた。しかし、不思議なことに、それは、わけのわからない力をもって、私をぐんぐんとどこかに引っばっていくようであった。

そうしたある日、私に決定的なことが起こったのである。それはつぎのような聖書の場